プロローグ……7

第1章　こころの遺伝子に出会うまで……13
勉強の「べ」の字もなく、遊びほうけた幼少時代……14
理科系への目を開かせたのは、父の「月下の講義」……17
旺盛な知識欲を満たすために、休日の図書館通い……20
将来を決定づける出会いを生んだ「坂田事件」……23
苦手な英語が零点でも、緻密な作戦で名大合格……29

第2章　自由と平等の研究室「E研」……31
生意気グループ「DEPHIO」を結成……32
フラフラした末、ついに坂田先生と対面……37
「E研」という名に託した坂田教授の思い……42
「屁理屈の坂田」VS「いちゃもんの益川」……46
優秀な研究者を育てた素粒子物理の梁山泊……50
こころの遺伝子に込められた思い……54

第3章　こころの遺伝子の源流をたどる……59
恩師から恩師へ、受け継がれたこころの遺伝子……60
物理学者であり哲学者でもあった坂田先生……64
ノーベル賞学者、湯川秀樹に議論を挑んだ「いちゃもん屋」……68
「口数が多い」という理由から任された大役……72
自由で民主的な家庭を宣言した「地味婚」……76
名古屋からの巣立ち、そして恩師との永遠の別れ……81

第4章　究極の素粒子を追いかけて……85
日本のお家芸、素粒子物理学の流れ……86
周回遅れの先頭だから、見えたものがある……91
のどに刺さった〝魚の小骨〟になった、一つの論文……94
同じく坂田先生を慕う、後の盟友との出会い……99
伝統ある京大で、E研仕込みの議論を展開……103
小林さんとの再会。そして、運命の時計は動き出す……107

第5章　ノーベル物理学賞への道……111
CP対称性の破れに、向き合う時がやってきた……112
立場の弱い職員のために、組合の書記長として奮闘……116

湯船をまたいだ瞬間、突破口がひらめいた……119
反応はゼロ。でも、一向に気にしなかった……125
ついに受賞の知らせ。しかし、電話の対応に「カチンッ」……131
アイ・キャンノット・スピーク・イングリッシュ……136

第6章　こころの遺伝子を次代につなぐ……141
受賞は、坂田さんへの罪滅ぼしでもあった……142
恩師の長男に影響を与えた「いちゃもん屋」……145
E研の哲学にもつながる、恩師が残した最後の書……149
もっと具体的、積極的に平和問題に関わりたい……154
こころの遺伝子を、次代に伝えていくために……159

あとがき……165

西田敏行のコラム
小学校時代は〝漫才師〟。鋭いツッコミで先生を困らせた……58
民主的で対等な夫婦関係にはいつもリスクが潜んでいる？……84
ノーベル財団の〝罠〟にはまらなかった益川さん……110
エンゲルス、マルクス……。哲学談義に司会者真っ青……140
いつも、自分に正直であれ～番組収録を終えて～……164